

地域に暮らす障がい児への発達支援

—クリスマス会の企画における学生の学び—

小橋 拓真・菅原 美保・鹿内 あずさ・笠見 康大

抄録：本学では、地域在住の医療的ケア児（以下、対象児）の社会参加を促すとともに、学生の学びの場を提供することを目的とした北海道文教大学スマイル・プロジェクトを多学科連携で行っている。プロジェクトの一環として、A市の就学前医療的ケア児の短期入所事業所と連携し、学生がクリスマス会を主体的に企画・運営することで対象児と学生との交流の機会を得た。イベント後に学生へのアンケート調査（学びのレポート）を実施し、事前準備や当日の運営についての気づきや学びについて記述してもらった。在宅療養児とのコミュニケーションを通じて、参加した学生達より、「児の気持ちを捉えることが難しい」と感じつつも、一緒に取り組んだ創作活動などを通じて、児の楽しそうな表情など捉えるなどして、「体験を通じて、自信を持つことができた」などの気づきや学びの回答があった。スマイル・プロジェクトでの経験が、学生のキャリアアップに影響を与えた例もあった。

キーワード：障がい児、発達支援、クリスマス会、学生の学び

1. はじめに

近年、国際的にも障がい者の権利擁護への関心が高まり（内閣府 2011, 経済通産省 2016）、ノーマライゼーションという言葉も一般的に定着している。加えて我が国においては、障がいの有無にかかわらず、互いを尊重しあう共生社会実現のための法的な整備が行われてきており（厚生労働省 2023, 内閣府 2011）、文科省（2012）は、共生社会の形成に向けて、「あらゆる人々の多様性を尊重し、障がいのある者もない者も共に学び、個々の能力を最大限活かして、誰でも社会参加できる社会を作る」ためのインクルーシブ教育システムの構築を目指し、インクルーシブ教育の啓発や学校教育において知識や理解等の理論的な内容を学ぶ授業の展開（富永ほか 2011,）の課題があるといわれている（中村 2011, 田口ほか 2012）。この課題について中村（2011）は、障がいに関する専門的な知識を獲得するのみの授業では、学生にとって「障がい」は「自分たちとは異なる存在」として理解されてしまうのではないかと述べている。したがって、学生が「障がい」を学生自身の障がいを伴う人たちとの「かかわり」の中で捉え、「考える」というプロセスが必要（中村 2011）であり、このような「かかわり」を通じた援助経験が「障がい」に対する理解においてポジティブな受けとめとなり（田中・須河内 2004）、地域に暮らす医療的ケア児への個別的な支援につながるもの考える。

本学では、2017 年より、医療系・教育系 5 学科（健康栄養学科、作業療法学科、理学療法学科、こども発達学科、看護学科）が連携し、大学の地域貢献事業として北海道文教大学スマイル・プロジェクトを実施している（鹿内ほか 2023, 鹿内 2018, 鹿内ほか 2019, 鹿内ほか 2020, 村上ほか 2019, 山北ほか 2019）。本プロジェクトは、本学でのミニ運動会や大学近郊のある障がいを有する子どもたちの保護者や関連施設のニーズを受けて、12 月のクリスマス会などの季節のイベントを学生と共に準備し、その運営や実践を通じて、在宅療養児とその家族の活動や社会参加の支援を継続している。

本プロジェクトの特徴は、医療系や教育系の教員による多面的なサポートに加え、多学科連携による専門性の共有とイベントの事前準備から運営に至るまで、学生主体で実施する点にある。学生が実際に在宅療養児とかかわり、在宅療養児のもてる力（強み）に着目した援助経験を積むことで、学生の知的好奇心が育まれ、主体的に考える力を向上させるに至っている。加えて、他学科の学生との交流の場ともなり、専門分野の基礎学習の重要性を自覚し、専門職を目指す意欲向上にもつながることが期待できる。

2. 目的

本研究の目的は、北海道文教大学スマイル・プロジェクトの活動として2022年12月に企画・実施したクリスマス会における主体的に参加した学生の学びを分析することにより、学生たちの気づきや学びにおける変化を捉え、今後のプロジェクトの活動や学生教育への示唆を得ることである。

3. 方法

3.1 研究協力者

本研究の協力者は、スマイル・プロジェクトの一環として、2022年12月に実施したクリスマス会（A市の就学前医療的ケア児の短期入所B事業所と連携して実施）へ参加した看護学生3名である。

3.2 企画の内容と手続き

クリスマス会は、2022年12月にB市の就学前医療的ケア児の短期入所B事業所のニーズを受けて実施した。参加した在宅療養児の身体機能や参加人数を考慮して、当日のプログラムを学生が考案した。参加学生は、事前に短期入所事業所より得た在宅療養児の情報〔表1〕をもとに、プログラムとして、ペープサート（紙人形劇）の実施、楽器でのジングルベルの演奏、クリスマスカードの作成（児が好きなキャラクターなどのシールを選び、シールの貼る場所をスタッフの支援を得て児と相談する）など、児が楽しめる物品などを工夫して実施した。

表1. 対象児の概要

年齢・性別	主疾患	好きな物/ キャラクター	兄弟の有 無
3歳・男児	重症新生児仮死	アンパンマン・ミッフィー	一人っ子
4歳・女児	漏水後蘇生後脳症	ピンク色/マメイロ・クロミ	兄が2人
5歳・男児	4P-症候群	オレンジ・茶色/ミッキー・トイストーリー	一人っ子
5歳・男児	心室中隔欠損症	黄色/猫・スヌーピー・ペンギン	弟が2人
5歳・男児	脊髄性筋萎縮症	青・水色/恐竜・海の生き物	一人っ子

3.3 アンケート調査

COVID19が感染症法で5類となったが、感染予防に配慮して、学生はマスクを着用してかかわった。参加した学生の学びについて検証するため、クリスマス会後に、学生に対して自記式質問紙によるアンケート調査を実施し、学びの振り返りを行った。質問項目は、1) 所属・年次、2) 自身がかわった活動内容、3) 主に自身がかわった在宅療養児の障がいの状態について、4) かかわりの中での工夫・

意識した点、5) 困難であった点、6) かかわった在宅療養児の今後についてどのようになってもらいたいと感じたか、7) かかわった在宅療養児の強み・長所、8) かかわりの前後での自身の変化、9) 参加しての思いや全般的な感想の9項目であった。これらの内容を質的に分析した。

3.4 倫理的配慮

本研究は、北海道大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号:30024）。参加した学生、および、事業所スタッフ、在宅療養児、保護者に対しては、文書、および、口頭で説明し、同意書の署名をもって同意を得た。実施にあたっては、いつでも辞退可能であり、その際の不利益はないことを説明した。学生の対しては、活動前にボランティア活動保険に加入すること、研究で得た学生の学びについて学会等で公表すること、結果を学生にフィードバックすることを伝え、了承を得た。

4. 結果

4.1 参加学生の概要と実施内容

2022年12月に実施したクリスマス会の企画は、A市の就学前医療的ケア児の短期入所B事業所と共同で実施した。開催日時は、B事業所が平日の運営であるため、平日の授業等がない学生を調整し、当日授業がある学生は準備協力を行った。事前の準備には、こども発達学科2名、看護学科3名で行った。当日は、こども発達学科の学生が主体となって企画したプログラム(図1)を看護学科の学生3名が実施した(写真1～5)。プログラム実施後に対象児が好きなキャラクターを手作りの靴下に入れたものをプレゼントし、事業所スタッフの協力を得ながら対象児とコミュニケーションをとり、学生がイラストを描いたクリスマスカードにシールを貼って楽しんだ。プログラム終了後、学生に対して、アンケート調査(学びのレポート)を実施した。

2022 クリスマス会 パネルシアター シナリオ

・登場人物 サル(サ) うさぎ(う) リス(リ) サンタさん(☺)
・ナレーション(ナ)

～お昼～
ナ 今日クリスマススイブ!どこかの森の動物たちも、サンタさんか来るのを楽しみ集まっています。森の様子を少し覗いてみましょう。」

サ みんなプレゼントは決まったかい?
リ 僕ももう決まったよ!新しく素敵な帽子を頼んだ!!
ウ 私お内緒!!
サ 僕は大好きなサナが早くさん食べような～
ウ 明日また集まった時みんなまでせーので見せ合いっこしよう!!
全 まだね～!!

～夜～
ナ よしこの夜(ソ) ナ 夜になりました。良い子は寝る時間です。夜になるとサンタさんは大忙しでみんなのプレゼントを届けます。」

※シングルベイル(ミ) FULL Ver
☺ 「よし!この森でプレゼントは最後だ!でもプレゼントを包んだらどれか忘れかけずからなくなっちゃった!どうしよう…」

☺ 「あっ!でもプレゼントにわかりやすいように動物たちの好きなものの目印をつけたんだ!!」

～プレゼントを取り出して子供たちに見せて周りつつ～
☺ 「このプレゼントは、ノサナが書いてるからこのサナのお家かな?
このプレゼントは、どんぐりだからこの木の形のお家かな?
じゃあ最後のこのプレゼントはみんなの形のお家だ!!」
☺ 「さ!朝か来る前ご帰るなきゃ!!」

～朝～
ウ みんなおはよう!!
サ リ! おはよう
リ 見てみて!僕の大好きなどんぐりのお家子が届いたの!おしゃべりして!!
サ 僕は大好きなサナ!こんばんは!早く食べると嬉しいな!!
ウ 私はおっきなみんな!どうやって食べるか悩んじゃう!!

ナ こうして、この森の動物たちにも無事プレゼントが届きました!みんなのところにどんなプレゼントが届くのか楽しみがね!おーしま!!

図1 2022 クリスマス会 パネルシアター シナリオ



写真1 参加した看護学生



写真2 当日準備の様子(1)



写真3 当日準備の様子(2)

学生は事前準備から運営・開催に至るまで主体的にかかわり、学生間の交流を図る機会となった。学生は、クリスマス会の初めのうちは緊張が強く、対象児に対する声掛けするに戸惑う様子があったが、事業所スタッフの協力を得て徐々にかかわり方に慣れ、笑顔で児とかかわる様子がみられた。事業所のスタッフからは、「最初は戸惑いもあったと思いますが、対象児の反応をみながら、上手にかかわっていました」「子どもたちの興味や関心に目を向けて、準備の段階から一人ひとりのことを考えてくれて嬉しい」などの評価を得ていた。

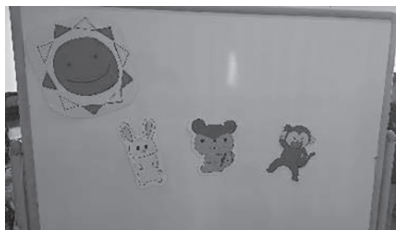


写真 4 紙人形劇のキャラクター

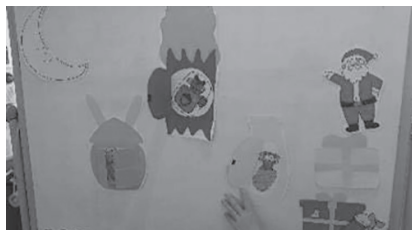


写真 5 実施の様子

4.2 アンケート結果

困難に感じたことについては、「児の気持ちをどうとらえるかが難しい」「伝えたことを理解してくれているのかを知ることが難しい」という回答があった。

かかわりの中での学生自身の変化については、「シールを貼るとき、楽しそうな表情があった。褒めるとさらに嬉しそうな表情をしてくれた。最初は精一杯だったが、体験を通じ自信をもつことができた。」という回答があった。

工夫したことについては、「わかりやすい言葉を意識する」「目線・表情・手の握る強さなどに着目し、児のペースに合わせて声かけをする」という回答があった。

対象児とのかかわりでの思いについては、「児は言葉で伝えるのは難しくても、表情で気持ちを多彩に伝えることができると気づかされた」「臨地実習や働く場でも学んだことを生かしていきたい」という回答があった。

5. 考察

5.1 医療的ケア児と接することで生じた学生の肯定的な感情

アンケートの結果から、医療的ケア児と共にイベントやプログラムを共に体験する機会をもつことで、「児は言葉だけでなく、表情や目線などで色々な思いを多彩に表現できる強みがあることに気づいた」「貼るシールを選ぶときのやりとりで、児の興味や関心がわかった。こうしたかかわりそのものが、心の交流になると感じた」「使う道具や、手引きなどを工夫することで、児も色々な作業に参加でき、もっと成長を促すことができると感じた」等の児に対する理解が深まり、初回の戸惑いを覚えながらかかわっていた頃と比べると、看護学生達のより積極的なかかわりが期待できる。

学生は、「会話ができないことの戸惑い」「児の思いに寄り添ったかかわりの難しさ」といったイメージを抱えていたため、当初、医療的ケア児と接した際に、児とどのように接するかについて、戸惑いがあったと推察された。しかし、医療的ケア児と実際にふれ合うことで、表情や声の調子など非言語的コミュニケーションを通じて、児からの多彩な反応を目の当たりにすることで、「児のできることへ着目した、ケアの視点が得られた」という気づきが、アンケート内容から読み取れた。これにより、

医療的ケア児とのかかわりを通じて、エンパワーメントに着目した援助の視点が得られたのではないかと推察される。

以上のことから、学生は実際に医療的ケア児と接することで、対象の状態や反応を知ることができ、児の強みに気づくことで、医療的ケア児に対する様々な戸惑いから肯定的感情への芽生えにつながったのではないかと推察された。そして、ここでの学びは、児が本人らしく過ごすための環境やかかわり方に活かせるものとする。

5.2 医療的ケア児とのかかわりから、学びを深めた看護学生への期待

対象児とのかかわりを通じて、学生自身が当初抱いていた接し方への戸惑いや緊張は和らぎ、これからの実習や就職後も学んだことを深めたいなどの意欲的な感情を生みだし、大学での学びに繋がっていることが示唆された。

学生は、対象児と実際に接することで「児の強み」に気づく機会を得ていた。また、このときの体験を振り返り、自分の心の声を言語化することは、看護大学生や看護職者としての学びの積極性や主体性を向上させる（新井 2013）だけでなく、自ら目指す看護師像にもインスピレーションを与えるものとして期待されるため、学生が卒業までにスマイル・プロジェクトで良い経験を積むことに貢献していきたい。

文献

新井英靖「考える看護学生を育む授業づくり」『メヂカルフレンド社』10-97。

経済産業省、2016、「障害者差別解消法について」

https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/shougai/downloadfiles/gaiyo_sabetsukaisho_meti.pdf
(アクセス日：2023.8.9)

厚生労働省、2023、「障害者総合支援法等の改正について」

<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/001041541.pdf> (アクセス：2023.8.9)

文部科学省、2012、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm
(アクセス日：2023.8.9)

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・白幡亜希・小塚美由記・福士晴佳・服部裕子・佐藤明紀、2019、「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—作業療法学生の学び—」『日本子ども学会』

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子、2020「障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト—ミニ運動会における学生の学び—」『日本感性工学会北海道支部 感性フォーラム in 札幌』

内閣府、2011、「障害者基本法の改正について」

<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonhou/kaisei2.html> (アクセス日：2023.8.9)

中村義之、2011「障害理解の視点—「知見」と「かかわり」から—」『佛教大学教育学部学会紀要』10: 1-10.

鹿内あずさ・村上優衣・小橋拓真・菅原美保・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・佐藤明紀、2023、「コ

- コロナ禍における障がい児・者への発達支援活動—北海道文教大学 スマイル・プロジェクトの取り組み—」『日本感性工学会北海道支部 感性フォーラム in 札幌』
- 鹿内あずさ, 2018, 「在宅における児の発達支援—」『こどもと家族のケア』12(6): 14-18.
- 鹿内あずさ・村上優衣・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・服部裕子・福士晴佳・佐藤明紀, 2019, 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—スマイル・プロジェクト—」『日本子ども学会』
- 鹿内あずさ・村上優衣・服部裕子, 2020, 「医療的ケア児と保護者の暮らし—新型コロナウイルスが拡がる中で不安や戸惑い—」『こどもと家族のケア』15(3): 91-95.
- 鹿内あずさ・村上優衣・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子, 2020, 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト—A 大学5学科の学生と教員の活動を通して—」『日本感性工学会北海道支部 感性フォーラム in 札幌』
- 田口禎子・林安紀子・橋本創一・池田一成・大伴潔・菅野敦・小林巖・三浦巧也・戸村翔子・村松綾子, 2012, 「通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討—教師志望大学生の障害理解と障害理解教育に関する調査—」『東京学芸大学紀要』63: 303-319.
- 田中淳子・須河内貢, 2004, 「知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究」『岡山大学院大学・岡山短期大学 紀要』27: 59-67.
- 富永光昭・金森裕治・井坂行男・西山健・平賀健太郎, 2011, 「新時代の特別支援教育に対応する教員養成システムの研究1—本学における特別支援教育科目の教員養成課程必修化の意義と課題(第1報)—」『大阪教育大学紀要』60(1): 141-151.
- 山北葵・小塚美由記・白幡亜希・鹿内あずさ, 2019, 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—栄養学科学士の学び—」『日本感性工学会 北海道支部 第7回学生会』

Support for the Development of Children in the Community with Disabilities —Realization of students throughout the process of planning a christmas party—

KOHASHI Takuma, SUGAWARA Miho, SHIKANAI Azusa and KASAMI Yasuhiro

Abstract: In our university, we are implementing the Hokkaido Bunkyo University Smile Project, a multi-disciplinary project that aims to encourage the social participation of children in the Local Community receiving medical care at home, as well as to provide a platform where students can learn. As part of this project, students planned and held a Christmas party in collaboration with a short-term admission office for preschool children receiving medical care in City A to encourage interaction between children receiving medical care at home and students. After the event, we surveyed students and asked them to describe what they noticed and learned in the process of preparing for and on the day of the Christmas party. The participating students said that by communicating with children receiving medical care at home, they were able to witness the happy expressions of children while they worked together on the creative activities despite finding it "difficult to understand their feelings." Some students had some realizations and learned things saying, "This experience allowed me to gain confidence." In some cases, the experience at the Smile Project had an impact on students' career paths.

Keywords: children with disabilities, developmental support, Christmas party, student learning